

深山リンドウ

えられた歌」として、「深山(みやま)リンドウ」が収録されている。

く哀調を帯びたこの曲は、深志高校山岳部の部歌のように唱いつがれてきたものだと述べている。

ともあって、いたたまれずに行ってみたくなると、週末の湯に泊り、翌二月八日の日曜日に上高地一帯を和らぐ歌が配られて、出席者全員で斉唱したのは、去る三月十四日に松本市内で開かれた松中・深志山岳部OBの席上であった。その夜、私も東京から駆けつけてみると、プログラムが出来ていて、いささか驚いたことになり、私の「厳冬期の上高地単行の報告」なるものも載っていた。それは、本紙一月三十日付の紙面に真冬の上高地の美しいカラーグラビアが出ていたこと

の青柳健氏が昭和三十年代中頃に唱っていたもので、東京外語大山岳部に在籍した昭和三十年代前半は、山の哲学者として著名な串田孫一先生が部長をつとめられ、山の雑誌『アルプ』に連なる人が輩出した頃で、外語山岳部の全盛期であった。昭和三十年代半ばは、ちょうど「六〇年安保」の時期だったので私はしばらく山岳部を離れていたが、その頃、「アルプスの乙女」が唱われていたようである。そのあとに出た山の歌のレコードがあったとのことで、「山の大尉は傷ついた」などの曲とともに「アルプスの乙女」も収録されていたのではないかと、青柳氏は言うけれど、この日本製レコードを外語山岳部のOBが入手したのは、異郷のインドにおいてであったことと、結局はつきりしたことはわからなかった。

い起される。「深山リンドウ」のメロディーはいかにも大正ロマン風の日本調ではあるが、譜面上の曲の形式は洋楽風でもある。曲に比べて、歌詞の方が内容的にやや平板で整合性に欠けるようにも思えるが、「恋しアルプスの乙女の夢」とリフレインされていることからすると、ピアノ曲の「アルプスの乙女の夢」を知っている人が、何かの西洋音楽のメロディーを下敷にして、作詞・作曲したのかもしれない。あるいは岳人たちがおのずと歌詞を即興的に唱いつぎ、今日のようなものになったものとも思われる。

山の歌集は数多いが、このたび山と深谷社から発刊された土橋茂子編著『山の歌集』は、曲のすべてに楽譜と伴奏用コードネームが付されているばかりか、「歌い出しさくいん」があったり、高山植物のカラー写真や夏・冬の星座表がついていたり、様々な工夫がなされていて、小著ながら大変素晴らしい。だが、それ以上に嬉しいのは、選ばれた国内外の百曲のなかに、「松本深志高校山岳部に伝

く哀調を帯びたこの曲は、深志高校山岳部の部歌のように唱いつがれてきたものだと述べている。

ともあって、いたたまれずに行ってみたくなると、週末の湯に泊り、翌二月八日の日曜日に上高地一帯を和らぐ歌が配られて、出席者全員で斉唱したのは、去る三月十四日に松本市内で開かれた松中・深志山岳部OBの席上であった。その夜、私も東京から駆けつけてみると、プログラムが出来ていて、いささか驚いたことになり、私の「厳冬期の上高地単行の報告」なるものも載っていた。それは、本紙一月三十日付の紙面に真冬の上高地の美しいカラーグラビアが出ていたこと

の青柳健氏が昭和三十年代中頃に唱っていたもので、東京外語大山岳部に在籍した昭和三十年代前半は、山の哲学者として著名な串田孫一先生が部長をつとめられ、山の雑誌『アルプ』に連なる人が輩出した頃で、外語山岳部の全盛期であった。昭和三十年代半ばは、ちょうど「六〇年安保」の時期だったので私はしばらく山岳部を離れていたが、その頃、「アルプスの乙女」が唱われていたようである。そのあとに出た山の歌のレコードがあったとのことで、「山の大尉は傷ついた」などの曲とともに「アルプスの乙女」も収録されていたのではないかと、青柳氏は言うけれど、この日本製レコードを外語山岳部のOBが入手したのは、異郷のインドにおいてであったことと、結局はつきりしたことはわからなかった。

い起される。「深山リンドウ」のメロディーはいかにも大正ロマン風の日本調ではあるが、譜面上の曲の形式は洋楽風でもある。曲に比べて、歌詞の方が内容的にやや平板で整合性に欠けるようにも思えるが、「恋しアルプスの乙女の夢」とリフレインされていることからすると、ピアノ曲の「アルプスの乙女の夢」を知っている人が、何かの西洋音楽のメロディーを下敷にして、作詞・作曲したのかもしれない。あるいは岳人たちがおのずと歌詞を即興的に唱いつぎ、今日のようなものになったものとも思われる。

「深山リンドウ」考

昨日ザイルを肩にかけきれいな若い旅人が越えたあの尾根線にかすむ深山リンドウの恋しし／恋しアルプス乙女の夢よ

この「深山リンドウ」が話題になり、楽譜つきで、今回、この歌の採譜に協力された深志山岳部OB(高十四回卒)の植松晃岳氏は、「最初に山岳部に持ち込んだのは常松文彦氏(高十四回卒)。常松さんはオツである小林俊樹氏(高四回卒、顧問)や青柳健氏(高四回卒、東京外語大山岳部OB)らと共に、昭和三〇年代に瀧沢寛太とのことで「部歌『深山リンドウ』について」、松中・深志山岳

私のおとには、常松文彦氏が「部歌『深山リンドウ』のこと」を語り、この歌について話題が広がったのであるが、昭和二十年年代後半は頃に深志の後輩した私たちは、この歌を唱ったことはなかった。席上、やはり先

人は何人かいたけれど、当時は「アルプスの乙女」という題で唱っていたという。やはり青柳氏や小林氏らがあるが、昭和二十年年代後半は頃に深志の後輩した私たちは、この歌を唱ったことはなかった。席上、やはり先

「アルプスの乙女」という原題を深志山岳部の諸君がいつの間にか「深山リンドウ」と呼びかえたのだとしたら、それもまた、いかにも信州の岳人の愛唱歌としてふさわしいことだといえよう。(東京外語大教授・中嶋権雄)